

色づくりから自分づくりへ

—教科横断を視野に入れた生徒の自己有用感の醸成—

*石山美穂

Making colors to better myself
—Fostering student's self-usefulness through cross-subject teaching—

ISHIYAMA Miho

概要

これまで美術科教員として、生徒に自己を表現する力を身に付けさせるために表現や鑑賞の授業に取り組んできた。その「自己表現」を更に「自己有用感」につなげていくことが、現在の課題である。その課題に対し、大変効果的だと感じた実践が「地域の色・自分の色」実行委員会が大分県で行っている「色づくり」をテーマに行う探究学習である。これは、小・中学生が地域の素材を使って色を作り、自己を表現する学習で、探究活動を通して学んだこと・伝えたいことを積極的に地域に発信し、受け入れられている。それによって、児童・生徒は「自分は地域から肯定的に評価されている」という「自己有用感」を育成することができている。この実践を踏まえ、「自己表現」に関連した主な題材と、それによって身に付く資質・能力を確認し、美術科として効果的・効率的に授業を工夫していくことを考えたい。また、教科横断を視野に美術を土台として教育活動を展開することで、更なる自己有用感を高める手立てを探りたいと考える。

Key words : 色づくり, 自己表現, 自己有用感, 教科横断

はじめに～課題意識～

「先生、美術の授業って何の役に立つの？」中学校で美術を指導し始めて間もない頃、生徒から何度かこの言葉を掛けられたことがある。その度に「どのように指導すれば美術の必要性が生徒に伝わるのか」と悩み、試行錯誤を繰り返してきた。そして現在、生徒には「美術とは、思いを表現すること、作品によって思いを伝えようとする」と、すなわち「自己表現の手段」だと指導し、表現や観賞に取り組ませている。その過程で気付いたことは、生徒に主体的に自己を表現させるためには、その表現を受け止める他者の存在が必要であるということだ。自己を表現したものを、他者に評価され大切にもらうことが、「自己有用感」につながり、次の制作へのモチベーションとなっている

く。これまで美術科教員として、生徒に身に付けさせてきた「自己表現」の力を、更に「自己有用感」につなげていくことが、次なる課題である。

「自己表現」を「自己有用感」につなげる実践として、「地域の色・自分の色」実行委員会・秋田喜代美編著『色から始まる探求学習』では、大分県で行われた「地域の色」を作る活動について紹介している。「地域の色・自分の色」実行委員会は、県内の幼稚園1校と小学校3校、県立美術館、芸術文化スポーツ振興財団、教育委員会、大分大学が相互連携して運営している組織で、2016年4月からは「幼少期における地域の色」をテーマとした教科融合型学習「色プロジェクト」を推進し、「色の探究モデル」の開発と効果検証に取り組んでいる。この中で藤井康子、西口広泰は、「色」は「各教科を融合させる素材」として学問的に価値のあるテーマ

* 9期生・仙台市立広瀬中学校

であり、「色の探究学習」には以下の4つの学問的視点があるとしている。

ア 芸術的視点

色と人間の感性の関係性について芸術的に探究して自分を表現すること、他者について知ること

イ 科学的視点

光や物質の色に係わる様々な現象を観察して調べること、実験から得られた結果やアイデアをもとに推論すること

ウ 社会学的視点

色と人間の関係について調べて郷土の文化を知ること、郷土の文化特性を明らかにすること

エ 言語的視点

色と人間の身体との関係性について探ることを通して色の概念を構築すること、色を表す言葉を吟味して他者と相互に伝え合うこと

その「色プロジェクト」の具体的な実践例として、県最北端の離島姫島村の小・中学校で行われた「姫島色をつくるプログラム」が挙げられる。これは姫島村で採取した素材を使って顔料や染料を作り、「姫島の色」を感じる美術体験である。中学校ではその体験による学びのまとめとして「はがき新聞」を作成した。「はがき新聞」は、姫島港のフェリー乗り場にて展示・配布されるなど、他者に評価される機会が意図的に設定されていた。フェリー乗り場では新聞が次々と持ち帰られ、短期間のうちに増刷が必要になった。その経験から、生徒たちは自分たちの活動が地域の人に受け入れられ、肯定的な評価を得ているという実感、つまり「自己有用感」を高めることができていた。

このことから、「美術体験において他者に評価される機会が意図的に設定されている」ことは「自己表現」を「自己有用感」につなげる方法として効果的であることが分かる。それを踏まえ、美術科における授業実践を見つめ直し、「自己表現」が生徒の「自己有用感」を育成することができているかを検証したい。

また、中学校における美術の年間授業時間数は、平成元年では1～2年生が70時間、3年生が35時間あったにもかかわらず、現行では1年生が45時間、2・3年生が35時間と減少傾向にある。したがって、限られた授業時間の中で、効果的・効率的に実践を工夫していく必要がある。更に、「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編 第3章 第2節 2 教科等横断

的な視点に立った資質・能力」に「教育課程全体を通じて目指す学校の教育目標の実現に向けた各教科等の位置付けを踏まえ、教科等横断的な視点をもってねらいを具体化したり、他の教科等における指導との関連付けを図りながら、幅広い学習や生活の場面で活用できる力を育むことを目指したりしていくことも重要となる」とあることから、今後、美術を土台として教科横断的に教育活動を展開していくことが、自己有用感を高め、学習指導要領に示される「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の向上につながるということを、本実践を通して広く周知していきたい。

1 「自己有用感」とは

本研究では、「自己有用感」について、「国立教育政策研究所生徒指導リーフ」を参照しつつ、「『自己表現』したもの（作品など）に対する他者からの評価、特に受容によって得られた『自己に対する肯定的な評価』」と定義し、考察を進めたい。それは、「知識・技能」または「判断力・思考力・表現力」を身に付けていく中で、「更に自分の表現を生活に生かしたい」とする生徒の「学びに向かう姿」を土台として、豊かに育てていくものだと考える。そこで、指導の工夫により、「学びに向かう力」を養うなかで「自己有用感」を付与できると考え、「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説美術編」を参考に、美術科では各題材でどのような資質・能力を生徒に身に付けさせたいかを「表1」にまとめた。

2 「色や形の探究」を通した「自己表現」と「自己有用感」

前述の「色プロジェクト」における評価は、4つの学問的視点による「色の探究の姿」を評価する規準によってなされており、児童生徒一人一人の学びが尊重され、子どもたちの主体性が高まるように配慮されていた。それを参考に、「美術の授業で生徒が自己を表現する姿」を評価するルーブリック作成した（表2）。

表1 美術で求められる資質・能力

知識・技能	<p>a「知識」(共通事項)</p> <p>i : 形や色彩, 材料, 光などの性質, 感情にもたらす効果などを理解する。</p> <p>ii : 造形的な特徴などを基に, 全体のイメージや作風などで捉える。</p> <p>b「技能」</p> <p>i : 材料や用具を生かし, 意図に応じて自分の表現方法を工夫・追求して創造的に表す。</p> <p>ii : 制作の順序などを総合的に考えながら, 見直しをもって表す。</p>
思考力・判断力・表現力等	<p>c「表現」</p> <p>[絵や彫刻など]</p> <p>i : 単純化や省略, 強調, 材料の組合せなどを考え, 創造的な構成を工夫し, 心豊かに表現する構想を練る。</p> <p>[デザインや工芸など]</p> <p>ii : 美的感覚を働かせて調和のとれた洗練された美しさなどを総合的に考え, 表現の構想を練る。</p> <p>iii : 伝達の効果と美しさなどとの調和を総合的に考え, 表現の構想を練る。</p> <p>iv : 使いやすさや機能と美しさなどとの調和を総合的に考え, 表現の構想を練る。</p> <p>d「鑑賞」</p> <p>[美術作品など]</p> <p>i : 造形的なよさや美しさを感じ取り, 作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考える。</p> <p>ii : 目的や機能との調和のとれた洗練された美しさなどを感じ取り, 作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考える。</p> <p>[生活・社会の中の美術の働き, 美術文化について]</p> <p>iii : 身近な環境の中に見られる造形的な美しさなどを感じ取り, 生活や社会を美しく豊かにする美術の働きについて考える。</p> <p>iv : 日本の美術作品や受け継がれてきた表現の特質などから, 伝統や文化のよさや美しさを感じ取り愛情を深める。</p> <p>v : 諸外国の美術や文化との相違点や共通点に気づき, 美術を通じた国際理解や美術文化の継承と創造について考える。</p>
学びに向かう力・人間性等	<p>e「学びに向かう力, 人間性等」</p> <p>i : 様々な対象や事象からよさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る感性</p> <p>ii : 創造活動の喜び</p> <p>iii : 創造活動に主体的に取り組む態度</p> <p>iv : 美術を愛好する心情</p> <p>v : 形や色彩などによるコミュニケーションを通して, 生活や社会と主体的に関わる態度</p> <p>vi : 美術文化の継承と創造への関心</p> <p>vii : 美しいものや優れたものに接して感動する, 情感豊かな心としての情操</p>

表2 「自己を表現する姿」ルーブリック

分野	芸術	科学	社会	言語
課題	色彩や材料を生かして自己を表現する。	材料の違いや色の効果などを観察・記録する。	表現が人や社会に与える影響などを感じ取る。	自分の思いから主題を生み出し, 伝え合う。
優れている	材料を意識しながら, 彩色や混色, 形づくりの面白さを感じ, その特徴を生かして作品に表せる。	材料の違いや色の効果, 形などを観察し, 気付いたことや確かめたことをスケッチやメモなどを活用して記録・蓄積している。	表現が人や社会に与える影響などを感じ取り, 現代社会や自分自身を見つめ, 自分の意見や考えを持って構想を練っている。	自分の思いから主題を生み出しそれを表現するとともに, 思ったことや考えたことについて伝え合うことができている。
できている	材料を意識しながら, 彩色や混色, 形づくりの面白さを感じ, その特徴をとらえて作品に表せる。	材料の違いや色の効果, 形などを観察し, 気付いたことや確かめたことをスケッチなどを活用して記録している。	表現が人や社会に与える影響などを感じ取り, 自分の意見や考えを持って構想を練っている。	自分の思いから主題を生み出しそれを表現するとともに, 言葉で相手に伝えることができている。
やや足りない	材料を意識しながら, 彩色や混色, 形づくりの面白さを感じ, 作品に表せる。	材料の違いや色の効果, 形などを観察し, 気付いたことを記録している。	表現が人や社会に与える影響などを感じ取り, 構想を練っている。	自分の思いを表現することができているが, 主題を明確に伝えることができていない。
足りない	材料を意識せず, 彩色や混色, 形づくりの面白さを感じられず, 作品に表せない。	材料の違いや色の効果などの観察が不十分で気付いたことを記録できていない。	表現が人や社会に与える影響などを感じ取ることができていない。	自分の思いを表現することができず, 伝え合うことができていない。

(参考: 大分大学高等教育開発センター紀要「色はどこからきたの?」ルーブリック)

この評価規準を念頭に置き、各学年の美術科年間指導計画（H28～R2）を「色や形の探究」による「自己表現」をベースに作成した。以下に、各学年における主な題材と自己表現の方法を挙げる。

これらの題材による「自己表現」を「自己有用感」に

つなげる手立てとして、各学年で行っている活動が「校内作品展示」である（表4 手立てⅠ）。「表3」に示される鑑賞以外の全ての題材で行っている。

さらに3学年では⑬の前に「発表会」を行っている（表5 手立てⅡ）。

表3 各学年における主な題材と自己表現

〈1学年〉

題材名	内容	自己表現の方法
①「出会って広げよう～ゴッホ『種蒔く人』」 鑑賞・絵画（2h）	作品をよく観察し、作品の筆致や混色によって産み出された多様な色、作者の心情などを感じ取る。	自分で選んだ色鉛筆を3色使って筆致や重ね塗りを工夫し、それぞれが自分らしい色のカードを作成する。 
②「楽しく伝える文字のデザイン」 デザイン（12h）	レタリングを学び、イメージや伝えたい内容が相手にわかりやすく印象に残るよう、形や色彩、構成を考えて文字をデザインする。	自分の名前から一文字選んで由来や意味を調べ、そのイメージが伝わるように色や形の楽しさや美しさなどを考えながら絵文字を作成する。 
③「暮らしに息づく木の命」 工芸（12h）	用途や機能、使用する人の気持ちなどから構想を練り、形や木肌の効果などを生かしてバターナイフをつくる。	自分や友人が「使いたくなるバターナイフ」とはどんなものかを考え、自然素材である木の色や木目の違いを楽しみ、用具の特性を生かしながら創意工夫して表現する。 
④「一枚の紙から広がる世界」 工芸・絵画（12h）	仙台地方に伝わる郷土風「すゝめてんばた」を制作し、その背景にある自然観や人々の思いを感じ取る。	日本的な造形表現や「凧」という形式の面白さに気付き、日本古来の顔料や和紙などの特性を生かしてにじみ・ぼかしの効果などを味わいながら制作する（画像：和紙によるぼかし・にじみの練習）。 

〈2学年〉

題材名	内容	自己表現の方法
⑤「学びを深めよう～井上直久『塔の入り江』」 鑑賞（1h）	作品の制作過程から、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫を感じ取る。	モダンテクニックを使って生み出された形や色彩から発想を広げていく制作過程を自分の考え方で味わう。
⑥「心でとらえたイメージ」 絵画（12h）	心でとらえた感情や言葉の印象などから主題を生み出し、形や色彩の効果、材料や用具の生かし方などを工夫して創造的に表す。	モダンテクニックを使って生み出された形や色彩から発想を広げ、効果的にイメージを伝えるにはどうしたらよいか試行錯誤しながら表現する。 

<p>⑦「名画の魅力に迫る～レオナルド・ダ・ヴィンチ『最後の晩餐』」鑑賞（1h）</p>	<p>作品の構図、遠近や明暗の表現、人物の動きや表情などに着目し、作者の心情について思ったことや考えたことについて話し合う。</p>	<p>それぞれの手の動きをよく見たり、まねてみたりしてどのような感情を描き分けているのかを考え、役割演技を行うことで深く味わう。</p> 
<p>⑧「瞬間の美しさを形に」彫刻（12h）</p>	<p>躍動感や緊張感、美しさや楽しさなど、感動や驚きを生む瞬間を、生き生きとした「手」の形で表す。</p>	<p>白い粘土を材料とし、陰影や感触などを味わいながら、自分の体験や思いを交え、関節や筋肉の動きの表し方を工夫する。</p> 

〈3 学年〉

題材名	内容	自己表現の方法
<p>⑨「美を探し求めて～パブロ・ピカソ『ゲルニカ』」鑑賞（1h）</p>	<p>形や色彩、構図や描き方、制作過程から作者の心情や意図と創造的な表現の工夫を感じ取る。</p>	<p>作品の造形的なよさや色使い、描かれた背景、美術が社会に与える影響などを感じ取り、自分の意見や考えを持つ。</p>
<p>⑩「問題意識を形に～心のマンドラ」デザイン・絵画（12h）</p>	<p>「マンドラ」という表現方法を使い、言語を超えたところで多くの人に感じたこと、考えていることなどを伝える。</p>	<p>自分自身の内面、環境や平和、災害復興等をテーマとし、色彩を工夫しながら作品を制作することで社会や自分自身を見つめる。</p> 
<p>⑪「受けつぎつくる人の姿」鑑賞・工芸（5h）</p>	<p>県指定伝統工芸品「堤人形」について知り、自分たちの暮らしを豊かに彩る伝統的工芸品に込められた思いを、制作を通して感じ取る。</p>	<p>自らの願いを込めて色を選び表情を考え土人形の絵付けをすることで、「堤人形」に込められた思いやその美しさを、より深く感じ取り味わう。</p> 
<p>⑫「私との対話」絵画（12h）</p>	<p>自分の姿や心の中を見つめて、構成や用具の生かし方などを工夫して創造的に「自画像」として表現する。</p>	<p>卒業式で展示することを目標に、15歳の今だからこそ描き残せる自分を、鉛筆によるグラデーションを効果的に生かして表現する。</p> 

表4 手立てI 校内作品展示（全学年）

題材名	内容	自己表現の方法
<p>⑬「生活の場を飾る～みんなの作品を展示しよう」鑑賞（1h）</p>	<p>完成した自分の作品にキャプション（解説）を付け展示することで、校舎内を楽しく装飾する。</p>	<p>自己を表現したものを鑑賞し合うことで、他者評価を得る機会となり、次の制作への「学びに向かう力」へとつなげる。</p> 

表5 手立てⅡ 発表会(3学年)

題材名	内容	自己表現の方法
⑭「発表会の準備をしよう」鑑賞(1h)	発表会に備えて、作品の主題を確認し、小集団で互いの作品の良さや美しさを話し合う。	自分の思いをきちんと相手に伝えられるよう、考えをまとめてから発表できるように準備する。
⑮「発表会～みんなのマングラを鑑賞しよう」鑑賞(1h)	生徒一人一人が作品に込めた自分の「思い」を発表し、クラス全員で作品の主題を共有する。	互いにそれぞれの作品に込めた思いを知り、受け止め合うことで、その表現を認め合い喜び合う。 

校内展示をすると、生徒も教職員も驚くほど足を止めて作品に見入る。そしてその表現について互いに語り合う姿が見られる(観察による)。その時作品は「自己表現の手段」から「他者評価を得る手段」となり、他者が自身を評価してくれている、受け入れてくれているという認識が、「自己有用感」を醸成し、次へのモチベーション、つまり「学びに向かう力」につながっていく。



3 作品制作を通じた「自己有用感」

前述の指導要領解説美術編は「第2章 第1節 2学年の目標」において「第1学年では、内容に示す事項の定着を図ることを重視し、第2学年及び第3学年では、第1学年の内容に示す事項において身に付けた資質・能力を更に深めたり、柔軟に活用したりして、より豊かに高めるように」と記している。そのため、本指導計画においても1・2学年での学びを3学年の題材⑩「マングラ」で存分に生かせるように計画した。以下に、各学年の主な題材を挙げ、発達段階を考慮した上で自己を表現したものを「自己有用感」につなげる手立てをとっているかを分析する。

(1)第1学年 題材②「楽しく伝える文字のデザイン」

題材②は、自分の氏名から文字を選ぶところにポイントがある。名字からは自らのルーツに思いを馳せる

ことができ、名前からは両親が自分の名前に込めた思いを感じられるからである。題材①により色に込められた作者の心情やその効果を学んでいるので、その学びを生かして、選んだ文字のイメージが伝わるように、色や形の楽しさや美しさなどを考えながら絵文字を制作することができる。

評価は「表2」に従って行う。例えば「作品1」の作者は、スケッチやメモ等を活用して構想を練り(写真1・科学的視点)、筆だけではなく指やティッシュなどを用いて表現方法を工夫しながら作品を制作している(芸術的視点)。制作後、作者は次のように作品を解説している。「私は『ひ』を選びました。私の母に『ひな』の由来を聞いたところ、太陽のように暖かいイメージとのことだったので(社会学的視点)、背景を草原にして文字を光らせました。暖かいイメージにするためにゴシック体を選びました(言語的視点)。」



作品1

完成した生徒作品は、他者に評価される機会を意図的に設定するために「手立てⅠ」として全員分を校内に展示した。展示する場所は、各学年が利用する保健室前廊下である。すると早速、廊



写真1

下を通りかかる生徒は次々と足を止め「俺の貼ってある！お前のどれ？…結構うまいじゃん！」と互いの作品を見合ったり、上級生が「今年の1年生上手だね！」と語り合ったりするなど、作品を評価し合う姿が見られた。また、1学年担任からも「うちのクラスは色塗り雑ですけどユニークですよ！」「感動しました。学級通信に全員分載せたいと思います。」などの肯定的な声があがった（特に、学級通信への掲載は学級担任による肯定的評価の見える化である・写真2）。この手立てにより、まだ展示されていない学級の生徒が他学級の作品を見て「すごーい！うちのクラスはいつ飾るの？（表2 e-i, v, vi）」と、自分の表現した作品を展示されたいという前向きな思いを伝えてきたり、「絵文字面白かったー。次は何つくるの？（表2 e-ii, iii, iv）」「（ティッシュを使ったグラデーションの表現を見て）きれい！これどうやったの？私もやってみたい！（表2 e-i, ii, iii, v, vii）」など、次時の制作に期待する声がかけてきたりした。これらの生徒の言動により、「手立てI」は生徒の「自己表現」を「自己有用感」につなげることができていると分析した。



写真2



(2)第2学年 題材⑥「心でとらえたイメージ」

題材⑤では、井上直久「塔の入り江」を觀賞し、偶然生み出された形や色彩から発想を広げてイメージを広げていく制作方法を紹介した。1学年での学びを基に、題材⑤により更に発想・構想の過程を転換させて、心でとらえた感情や言葉の印象などを創造的に表したのが題材⑥である。具体的には、指導過程の前半で数種類のモダンテクニックを体験させ、それによっ

て生み出された形や色彩から自分の考え方で発想を広げさせていく（写真3）。発想を広げていく中で、行き詰まり、納得のいくまで何度もモダンテクニックに挑戦する生徒も見られた（科学的視点）。

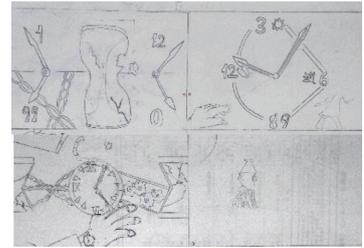


写真3

「作品2」の作者は、「真ん中の大きな時計を時空をゆがませるタイムマシンのようなものと見せ、上に戦争、下に野球の国際大会と、昔と今の国と国との戦いを作り（社会的視点）、テーマの『時間と平和』を表しました（言語的視点）。背景は戦争の爆発と野球観戦者の喜びを表すため、明るい色を、破壊を意識した形にしました。時計は2種作り、下に悲しみの黒を、上に喜びと歴史の赤・黄・青を貼りました（芸術的視点）。」また、「作品3」の作者は「モダンテクニックで



作品2「喜びの中で、悲しみの中で」



作品3「見えるセカイ」

を主に使い、左右対称にすることで、世界を表現し、スパッタリングで色々な色を使って（科学的視点）世界の大きさや多様性を表現しました（社会学的視点）。コラージュでは四角い額のようなものを手で破り、その人に見ている世界の狭さと自分で世界を大きくしようという気持ちを表しています。また、真ん中の鳥は大きくなってたくさんの世界を見ている人を表現しました（芸術的視点）。見ている世界の小ささと、一步踏み出せば見える世界の広さを表しました（言語的視点）。」と解説している。

完成した作品は、1学年作品と同時期に、職員玄関から職員室前廊下に展示した。絵文字作品に比べ、より作者の考えや心の中が投影された作品であるため、生徒たちは興味津々に觀賞している様子で、「さすが

Aさん。去年もすごかったんだよ。」「あ、Bさんのだ。Cさんのはどこかな。…すごい、こんなのよく描けるね!」などと語り合っていた。また、知っている先輩の名前を探しては「D先輩の作品好き!」と言い合う1年生、「この作品(情報があふれた現代社会をテーマにした作品4)のタイトルおもしろい。」と感心する職員の姿もあった。

「他のクラスの方が穏やかな作品が多いのに、ワイルドなうちのクラスが職員玄関(展示場所)でいいんですか?」と遠慮がちなa教諭は、担任する学級の作品解説を一つ一つじっくり読みながら進み、作品5の前で足を止めた。解説にはこうあった。「テーマは人の心です。このテーマを表現する

ために工夫したことは、白と黒の画用紙を交互に貼ったところです(芸術的視点)。僕は、人間は白く清らかな心と黒く濁っている心を持っていると思います(社会学的視点)。その中でも一番奥には白く清らかな心があると思います(言語的視点)。そこに、スパッタリングやローラーで色を付けて、人の表現力や思考力を表しました(芸術的視点)。」

それを讀んだa教諭から、感嘆の声が漏れた。「…Eさん(作品5の作者)ってこんなこと考えているんですね!」その後、Eは2学期の学級委員に立候補し抜擢され、



作品4「あなた次第」



作品5「人の心」



作品6「恐怖」



写真4

活躍した。

題材⑥の実践・展示後、数人が自分の普段描いている絵を定期的に見せに来るようになった(写真4, 5)。その中の一人であるFは、絵を描くことが大好きだが、双子の姉と比較されて育ってきたこともあり、自己肯定

感があまり高くない生徒である。作品展示に関しても「先生～なんで私の作品(作品6)、こんなに目立つところに飾ってあるの?」のように否定的な発言が目立つ。しかし「嫌だった?」と聞くと「別に大丈夫です!」と答える。そんなFの作品は県の造形作品展で入賞した。「え～、恥ずかしいです!」と言いながら、入賞作品集を購入し、初めてもらった賞状に満足げなF。その後ますます絵を見せにやってくるようになった。これらの事例から、「手立てI」により「自己有用感」が育ち、学びに向かう力(表2 e-i, ii, iii, iv, v, vii)が培われたと考えられる。

(3)第3学年 題材⑩「問題意識を形に～心のマンダラ」

題材⑨では、パブロ・ピカソ「ゲルニカ」の観賞を通して作品が描かれた社会的背景や美術が社会に与える影響などを指導した。そこから題材⑩では、生徒に「今、最も自分の心に影響を与えていることとは何だろう」と考えさせ、社会の状況や自分自身の内面を見つめさせる。

題材⑩の「マンダラ」は、宗教学者正木晃氏考案の「マンダラ塗り絵」からヒントを得た。点対称または線対称の図を基本形に、自らの

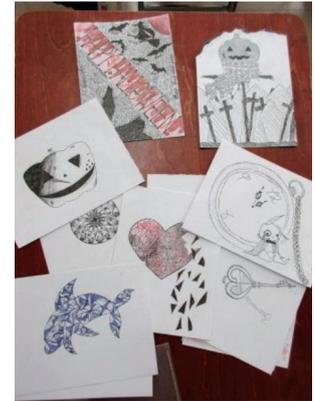
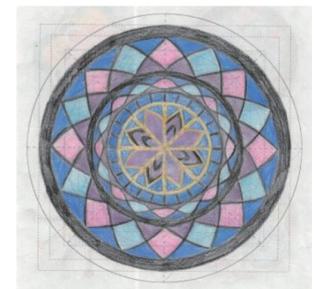
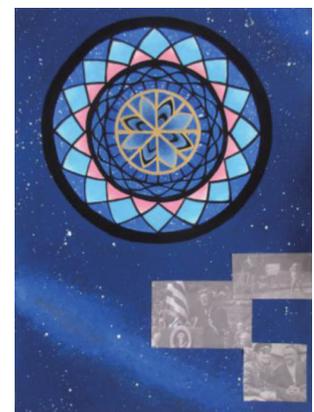


写真5



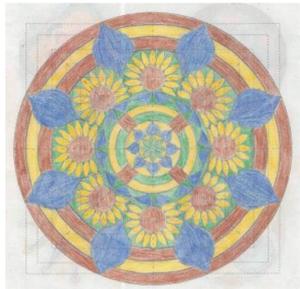
作品7の下絵



作品7「冷戦の夢」

心に内在するテーマを、コラージュなどを用いて表現させる。この題材は、生徒それぞれが1・2学年において身に付けた資質・能力を、更に深め、柔軟に活用することができるように考え、教材化した。そのため、制作の過程でマンダラは様々に形を変え(作品7・8)、テーマも変化し(社会学的視点)、加えられたり削除されたりして(科学的視点)、最終的に完成した作品からは「もう1つの私という日頃気付かない自分の発見」をすることができる。

また、題材⑩では一人一人が自分の作品をプレゼンテーションする「発表会(手立てⅡ：題材⑭⑮)」を行っている。生徒一人一人が作品に込めた自分の「思い」を発表することで、クラス全員で作品の主題を共有することができる。またその表現を、発表時の反応や拍手により互いに認め合い喜び合える。事後アンケートには、「自分の作品を見たときの印象が、人によって違うことが参考になった」「他の人の作品を見て、自分の作品にはない工夫点があり良かった。」などがあり、互いの作品を肯定的に評価し合っていることが分かった。



作品8の下絵



作品8「私たちにできること」



作品9「突然変異」



作品10「I LOVE」

また、1・2学年において身に付けた資質・能力の活用により、作品の主題はより豊かに高まってくる。「作品9」は、震災後間もない平成26年度作品である。作者は「核実験によりトカゲが突然変異して巨大生物になり汚染された世界を漂っている様子を描きました(言語的視点)。中央のマンダラは、突然変異により巨大化したトカゲを、充血した目や様々な色の垂らし込みによって怪獣のように表しました(芸術的視点)。背景のコラージュでは、この怪獣のように突然変異した生物や、怪獣に食べられてしまった人の骨で放射能に汚染された様子を表現しました(社会学的視点)。この怪獣に破壊された街を表すために核実験や原発事故によるキノコ雲の画像を貼りました。」と解説している。震災当時受けた衝撃と恐怖が切実に表現されている。

完成した作品は下学年の展示修了後、職員玄関から職員室・保健室前に掲示した。最上級生の作品ということで、生徒たちも期待しているが、職員からも、「自分自身の内面か、社会的なテーマか、年度ごとに作品の傾向が違うのが興味深い。」「生徒の考えていることが分かっておもしろい。楽しみにしている。」という意見が毎年聞かれる。後輩たちは「レベルが違う。」と



作品11 H24年度



作品12 H25年度



作品13 H26年度



作品14 R2年度

話す。「Gさんすごい、どうしたらこんなのが描けるんだらう。」「(作者が好きなものがマンダラの内外に隙間なくコラボされた作品10を見て)愛情がひしひしと伝わってくるね!」と、興味津々に見ている。中には、「私も早く作ってみたい。来年が楽しみ。」「マンダラのテーマはもう決まった。」という生徒もいた。

この指導は試行錯誤を繰り返しながら10年に及ぶ。毎年、作品を鑑賞した後輩たちが「私も作りたい」と感じ、主体的対話的に創作活動に取り組んだ結果、生徒作品自体が年々進化している(作品11~14)。これは、1・2学年での学びにより「自己有用感」を得たことによる「学びに向かう力・人間性等」の向上が、

3学年の作品として形に表れているものと考えている。

4 教科横断的な取組

自己表現の社会的視点、言語学的視点を考えたとき、子どもの成長は学校生活全般に及ぶ。ここでは、美術で習得した知識・技能の他領域、他教科との横断的な学習の可能性を探った。

(1)教科横断的な取組の考え方

指導要領解説総則編では「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」の1つとして、「グローバ

表6 育成を目指す資質・能力の関連する部分

	育成を目指す資質・能力	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
		○多様な他者と協働する様々な集団活動の意義の理解。 ○様々な集団活動を実践する上で必要となることへの理解や技能。	○所属する様々な集団や自己の生活上の課題を見いだし、その解決のために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したり、人間関係をよりよく構築したりすることができる。	○自主的・実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かし、人間関係をよりよく構築しようとしたり、集団生活や社会をよりよく形成しようとしたり、人間としての生き方についての考えを深め自己の実現を図ろうとしたりする態度。
特別活動	美術科との関連	a- i, ii b- i, ii	c- ii, iii d- ii, iii	e- i, iii, v, vii
	「自己表現」に関連した主な実践例			自己を表現する姿
	生徒会活動	○生徒会立候補者ポスター ○専門委員会の呼び掛けポスター ○学級新聞		○芸術的視点：美術で学んだことを生かして絵などに表す。 ○科学的視点：様々な集団活動を実践する上で必要となることを観察・記録する。 ○社会的視点：生活上の課題を調べ、集団や自己に与える影響を考えながら表現する。 ○言語的視点：様々な集団活動で体験したことを言葉で表す。
	学校行事	○激励会(横断幕等) ○体育祭(クラスTシャツのデザイン等) ○合唱コンクール(ポスター・看板等) ○文化祭(大壁画等)	 	
総合的な学習の時間	育成を目指す資質・能力	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
		○課題について横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して獲得する知識(及び概念) ○課題について横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して獲得する技能 ○探究的な学習のよさの理解	○探究的な学習を通して身に付ける課題を見いだし解決する力 ・課題設定 ・情報収集 ・整理・分析 ・まとめ・表現など	○主体的な探究活動の経験を自己の成長と結び付け、次の課題へ積極的に取り組もうとする態度を育てる。 ○協同的(協働的)な探究活動の経験を社会の形成者としての自覚へとつなげ、積極的に社会参画しようとする態度を育てる。など
	美術科との関連	a- i, ii b- i, ii	c- i, ii, iii d- iii, iv, v	e- iii, v, vii

総合的な学習の時間	「自己表現」に関連した主な実践例	自己を表現する姿
	<p>○各課題のまとめ等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職業調べ ・上級学校調べ ・個人研究 ・各行事の調べ学習・まとめ等 	 <ul style="list-style-type: none"> ○芸術的視点：美術で学んだことを生かして収集した情報を図や絵などを使い、分かりやすくまとめて表す。 ○科学的視点：課題に即した情報などを観察・記録し、整理・分析する。 ○社会的視点：実社会や実生活の中から課題を立て、情報を集めたり調べたりする。 ○言語的視点：収集した情報や体験したことを言葉で記録し、まとめ、伝え合う。

ル化の中で多様性を尊重するとともに、現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史について理解し、伝統や文化を尊重しつつ、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力」を教科横断的に育成するよう記している。関連する教科としては社会科、音楽科、技術家庭科など多くが挙げられており、美術科もその1つである。ここでは、教科融合型学習「色プロジェクト」において藤井康子、西口広泰が示した「色の探究学習」の4つの学問的視点から、美術を土台とした教科横断的な取組について示す。

(2)特別活動，総合的な学習の時間

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（平成28年8月26日）資料「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（第2部）（特別活動，総合的な学習の時間）」を参考に、特別活動，総合的な学習の時間において育成を目指す資質・能力と美術科との関連、各活動で「生徒が自己を表現する姿」に関連した主な実践例を「表6」に示した。

このように、特別活動や総合的な学習の時間において美術で習得した知識・技能を生かすことで、学習活動や探求の過程を更に豊かに表現することが期待できる。

(3)他教科との教科横断的な取組

I 社会科との関連

社会科と美術科の指導では「我が国固有の伝統や文化を尊重」という点で多くの共通点がある。関連する題材としては、④、⑪が該当する。どちらも仙台市博物館勤務時（平成21～23年）に開発した題材である。学習指導要領には当時から「伝統や文化のよさや美しさ」「美術館や博物館等と連携」「施設や文化財などを積極的に活用」とあり、「仙台市の子どもたちに

地域のよさについて知ってもらいたい」をコンセプトに社会科の指導主事と連携して取り組んだ。どちらの題材も郷土の工芸品を、教科横断を視野に「伝統的な素材・色・願い」をテーマとして教材化しており、特に藤井、西口の「色の探究学習」の4つの学問的視点でいう「ア 芸術的視点：色と人間の感性の関係性について芸術的に探究して自分を表現すること、他者について知ること、ウ 社会学的視点：色と人間の関係

について調べて郷土の文化を知ること、郷土の文化特性を明らかにすること」が意識されている。題材④について「作品15」の作者は「仙台に江戸時代から伝わる凧『すゝめてんばた』を作りました。凧絵では、激しく



作品15「荒波」

吹く風をイメージして描きました。風は目では見えないので荒波で描きました。工夫した点は、波をもっと荒く見せるために背景を赤くしました。また、波も、白や青で色を分けながら表しました。」と、郷土玩具である凧（社会学的視点）を飛ばす動力が風であることを理解し（科学的視点）、そのイメージを色を使っ

て的確に表現している（芸術的視点）。題材⑪は、特別支援学級担任の経験から、障害のある方たちの仕事にも結びつけたいと考え、地域の授産施設「ソキウス」「わたげ福祉会」に協力を求め、「絵付け用土人形」を製品化することができた。「作品16」



作品16「ウミサチピコとヤマサチピコ」

表8 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	
・筆者の絵画の見方や表現の仕方について考え、自分のもの見方や考え方を広げようとしている。	d- i, v e- i, iv, vi, vii
読む能力	
・用語などに注目して、文章表現の工夫を読み取っている。 ・筆者の絵画の見方について、 <u>知識や体験と関連づけて</u> 、自分の考えをまとめている。	d- iii e- v
言語についての知識・理解・技能	
・語句の効果的な使い方について理解を深め、語彙を豊かにしている。	e- vii

で作者は、「ウミサチビコとヤマサチビコは日本の神様の名前です。山が緑、海が青、なぜこれを描いたか」と山と海の幸（食料）に困らない生活をしたいからです。工夫した点はメッシュやアイシャドウです。」と、日本に伝わる神について調べ（社会学的視点）、色や模様で自分の願いを表現している（芸術的視点）。

II 国語科との関連

題材⑦「最後の晚餐」は、国語科の教科書、光村図書「国語2」単元「評論を読む 君は『最後の晚餐』を知っているか」でも指導されている。そのため、題材⑦については事前に国語科と打合せながら行っている。今年度は美術科の授業を先行することがより効果的であるという考えの下、情報共有しながら実践を行った。国語科の示すこの単元の評価規準と、美術科における資質・能力との関連は表8の通りである。

⑦の実践により、作品の構図や明暗の効果（科学的視点）、色や人物の動き、表情で表される思い（芸術的視点）、作品の主題について考えたこと（社会学的視点）が予習となり、主体的に次の学びである国語科の本単元（言語的視点）につなげることができた。余談になるが、「最後の晚餐」のキリストの唐突な発言に困惑する弟子たちについてセリフを考えさせ、希望者を募り、役割演技をさせたところ、観賞側の生徒から大きな拍手が起り、演技生徒も大変満足な様子であった。担任に「僕、今日キリストになったよ。」「勇気を出してユダをやった。面白かった。」などの報告があったため、録画したものを各担任に観ていただいた。「この生徒がこんな演技をするんですね。」「生徒から聞いていました。」などの語りが生まれ、来年の文化祭ではぜひ演劇をしようという意見も出た。

これらの取組から、改めて「色」は「各教科を融合させる素材」として学問的に価値のあるテーマである

こと、そして美術科と他教科の教科横断的な関わりが、広く他者からの評価を得ることができ、生徒の新たな「自己有用感」につながる機会になると感じた。

おわりに～生徒の成長～

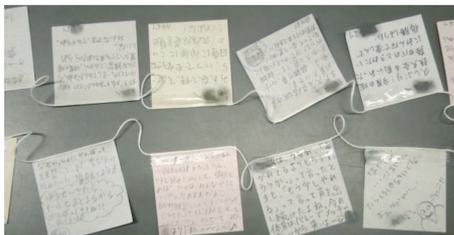
美術科では、4つの学問的視点による「自己を表現する姿」を中心に据えた教育実践を通して「自己有用感」を育成し、それを土台とした他教科との教科横断的な取組を探ってきた。そして生徒の取組やその言動から、自己を表現したものを、他者に評価され、受け入れられ、大切にしてもらった経験をしたこと、その経験から「自己有用感」が生まれ、次の行動へのエネルギーとしていたことがわかった。昨年度まで勤務していた前任校ではそれを実感する出来事がいくつかあった。最後に、そのうちのひとつを紹介する。

とあるクラスを担当していたとき、5月の陸上大会の際に積極的に声掛けをして優勝に貢献した男子生徒Hが夏休み以降に不登校となり、学級に暗い影を落とした。文字通り、色を失ったようであった。

球技大会の練習が始まった11月、学活で各行事での学級の頑張りを振り返りながら「みんな頑張ったけれど、もう一人、とっても頑張ってくれた人がいたよね。」と問い掛けた。すると、次々とHの名が挙がった。そこで「Hが球技大会に参加できるように何かできないだろうか。」と生徒たちと考えた。その時、生徒の一人が教室にあった小さな折り紙に目を留めた。そして、「この折り紙に、メッセージを書いて万国旗を作り、届けよう。」ということになった。そこで、折り紙を教卓に広げ、生徒各自に色を選ばせた。生徒はそれぞれHへの思いを込めて色を選び、心を込めてメッセージを書いた。例えば黄色の折り紙には、「H君が来な

くてみんなさみしがってるよ！長縄のときだって、H君が一生懸命声を出してくれたから、4組は1位を取れたし。だから、早く来てくれるとうれしいなあ。みんなで待ってるね！」、赤い折り紙には「長縄のとき、合唱のとき、いつもリーダーのように周りをまとめてくれたよね。今度、球技大会があるから、もし来れるなら、来てみてください。また、クラスの中心のような存在だったHを見たいです。」、青い折り紙には「また元気なHの姿が見たいです！私は、Hの事、ムードメーカーだと思っていて、Hがいるだけでクラスが明るくなっていくな～と思いました！また会いたいです、まってる(^_^)」などの多様な言葉が並んだ。黒板に掛けたタコ糸には、次々と色とりどりのメッセージが貼られた。

後日Hの家庭訪問をし「球技大会があるから体育の授業だけでも参加してみないか。」尋ねると「体育だけでもいいんですか。」と前向きな返答があったため、万国旗の端にある紐を持たせ、引っ張りながら広げさせて様々な色のメッセージを確認させた。ぱあっと表情が明るくなったH。その後、体育の授業から少しずつ登校し始めたHは、次第に朝から、そして毎日登校できるようになったことは、非常に印象深い。



みんなで作った万国旗(美術体験)は、Hにとって「他者に肯定的に評価される機会」となった。そしてそれによりHの「自己有用感」が高められ、「登校する」という次への「学びに向かう力・人間性等」の向上につながったのだと確信している。

今後も、美術を土台に教科横断的に教育活動を展開していき、生徒の自己有用感の醸成に向けて努めていく所存である。

※註

生徒の作品については、個人情報に配慮した上で研究活動として公表することがあることを生徒および所属長の了解を得ている。

引用・参考文献

- 秋田喜代美・木村典之・塩月孝子・首藤智絵・照山龍治(2019)『色から始まる探求学習—アートによる自分づくり・学校づくり・地域づくり』
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会(2016a)『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議の取りまとめ』
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会芸術ワーキンググループ(2016b)『芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ』
- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2015)『生徒指導リーフ「自尊感情」？それとも「自己有用感」？』
- 文部科学省(2018a)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 美術編』
- 文部科学省(2018b)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編』
- 文部科学省(2018c)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総合的な学習の時間編』
- 文部科学省(2018d)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編』
- 正木晃(2006a)『マンダラ塗り絵上級編』春秋社
- 正木晃(2006b)『子どもとお母さんのマンダラ塗り絵』春秋社